

「私たちが霊的に成長する為に必要な事」

ガラテヤ6：1－10

堀田修一 25・7・13

I 「もしだれかが何かの過ちに陥っていることが分かったなら、御霊の人（御霊を心に宿している人）であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい」：1。

1. 過ちに陥った人を正す、注意をすることは簡単な事ではない。特に正す人が、愛と柔和と識別もなく、「自分は正しく、あなたは罪人だ」と高圧的に正すなら、相手は心を閉ざし、良い結果は得られない。しかし、神に祈りつつ、へりくだり、柔和（原語：柔和、温順、親切、優しい）な心で正す時に、正される方も、心を開き易くなる。過ちに陥った人に、罪を悔い改め神に立ち返って欲しいという熱い愛、自分も弱さがあるという柔和を祈り求めたい。「愛がないなら、何の役にも立ちません」（I コリント13：3）。2. 柔和な心とは本日のみことばの文脈から分かる→

- ①「自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい」：1。過ちに陥った人だけが誘惑に弱いのではなく、「自分自身も心に罪が残っており、悪の誘惑に陥りやすいと自覚し気をつけ祈る」柔和な人。
- ②「だれかが、何者でもないのに、自分を何者かであるように思うなら、自分自身を欺いているのです。それぞれ自分の行い（心の中から出る行い）を吟味しなさい。そうすれば、自分にだけは誇ることができても、ほかの人に誇ることができなくなるでしょう」：3，4。柔和な人とは、自分を吟味し、自分こそ、罪人のかしらであり、悪魔に誘惑され過ちに陥りやすいと自覚し、誇ることなく、へりくだり、主の祈りの「私たちを試みに会わせないで、悪（悪魔の誘惑）からお救いください」と日々絶えず、心から祈る人。
- ③ある説教者の柔和の定義：「真実に自分を見つめるなら、自分について、ひど過ぎることを言える人はいないと分かる。真に柔和な人は、神も人も、自分をこんなに良いものに見て扱ってくれることに驚いている人」。
- ④「御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい」：1。御霊の実は柔和（ガラテヤ5：22）。私たちの心に御霊が結ばせて下さる柔和な心で正せますように。

II 「互いの重荷を負い合いなさい。そうすれば、キリストの律法（「わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛した（十字架で私たちの罪の重荷を担い、身代わりに死なれた。識別力のある愛で、それぞれにふさわしく重荷を負われた）ように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」（ヨハネ13：34）を成就することになります」：2。

1. 「互いの重荷（原語：重圧がかかる、重荷、苦勞、負担）」とは、過ちに陥った重荷、悲しみ、後悔、苦しみ、一人では負えない加重過ぎる責任の重荷。これらの重荷を負い合うとは、過ちや失敗、重圧、重すぎる責任、仕事、奉仕を理解し合い、愛し合い、ある時は柔和な心で正し、ある時は寄り添い励まし慰め、ある時は、過重な奉仕や責任の重荷を分け合い、助け合い支え合う。「私は、この分を受け止め、少しでも、あなたの重荷を軽くするお助けが出来ますよ」と。199 教会の JECA も支え合う連合。感謝！

2. 祈り合い。祈っていただくことは力です！私は、教会の皆さんに祈っていただいて、47年間の牧会を続けさせていただいています。祈られて神の力、支えを感じます。「私のためにも、私が口を開くときに語るべきことばが与えられて、福音の奥義を大胆に知らせることができるように祈ってください」（エペソ6：19）。

Ⅲ「人はそれぞれ、自分自身の重荷を負うことになるのです」：5。

このみことばの「重荷」の原語は、2節の「重荷」の原語とは違う。この5節の重荷は、一人で負える荷物、責任という意味です。私たちが識別して負う重荷、分、責任が聖書全体を深く読むと4つあることが分かります。

1. 「それぞれ」とは、まず、神が与えられた「自分自身が負うべき重荷、責任、分」。自分の分、責任。人は神が与えられた分、責任を果たすことで成長していきます。私も、神が与えられた私の分、責任を神に頼り果たす時に喜びが生まれます。※JECAの各教会の分。

2. 「それぞれ」とは、私がでしゃばってやってあげるのではなく、「その人が責任を果たす分」。分を越えて人の分までやるのは真の愛ではない。その人自身が自立したり成長したりする機会を奪うことになる。自分の分は、年齢や健康状態で変わるが、神に祈り識別力を頂いて、その人が、自分の分を果たし成長されるのを見守りたい。失敗しても、そこから学んで行く。神はそこを通されるのです。高齢の方々、健康を害する方々を祈りつつ支え合っていきたい。

3. 2節の一人では負えない「重い重荷、責任」。「互いに協力する分」。主の教会は、神がそれぞれに与えられた賜物を差し出し、わきまえ協力して主の教会を建て上げる。※JECAで支え合う分。

4. 「神の分」。祈りつつ愛を示し福音を伝えるまでは、私たち人の分、責任、神からの使命、役割。しかし、私たちは人を救う（永遠の救い）こと、信仰の強制はできない。人に罪を心で理解させ、主を信じる信仰を与え成長させるのは、三位一体の神の分、領域。「それでは、だれが救われることができるのでしょうか。イエスは…言われた。『それ（人を救うこと）は人にはできないことです。しかし…神にはどんなことでもできるのです』（マルコ10：26, 27）。「私が植えて（福音の種を蒔き）、アポロが水を注ぎました（祈り、みことばを語った）。しかし、成長させたのは神です（人を救い、成長させるのは神の分）」（Iコリント3：6）。主に頼りつつ、なすべき分を果たしたら、結果は神に委ねるべき分がある。

Ⅳ「人は種を蒔けば、刈り取りもすることになります」：7

1. 私たちは、ある行為をし続け、その結果を刈り取る、責任を自分で負うことによって、反省したり、学んだりして成長します。これは神が与えられた霊的な法則です。

2. ある人は、自分の分と人の分の境界線を設けなくて、愛と勘違いして、干渉し過ぎて、人が蒔いた良くない種、悪の行為の結果、刈り取りを請け負います（たとえば繰り返される盗みの弁償、借金の返済、人の宿題をいつもしてあげる）。それは相手の為になる真の愛ではありません。悪の種を蒔く人から、痛みや反省、自分で働いて弁償する、宿題をすることは、こんなに大変な事だと気づく機会を奪っているのです。「他人のことに干渉する者として、苦しみにあうことがないようにしなさい」Iペテロ4：15。

3. 神は、主の十字架で永遠の確実な救いを下さいます。その救い、義認は取り消されない。と同時に、この地上で私たちが犯す悪は、悔い改め自分で償うようにされます。それにより、反省し悔い改め、その悪を避けるように成長（聖化）させるためです。「主はその愛する者を訓練し（悪の種を蒔けば痛みがあると気づかせ）、受け入れるすべての子に、むちを加えられる（成長の為に、痛みという刈り取りをさせられる）のだから」ヘブル12：6。人生で悪の種を蒔き、結果の刈り取りをさせられる、責任を取らせられるのは、マイナスではなく、神の愛がない印でもありません。逆です。神は私たちを愛しておられるので、蒔いた種の刈り取りをさせ、痛みを通して悔い改めさせ、神に立ち返らせ成長させられるのです！

祈り：私たちは、柔和な心で正し、互いに愛し合い、互いの重荷を負い合い、自分の分、人の分、主の愛で協力する分、神の分を識別し、成長し、分を越えた干渉をしないように導いて下さい。